

奈良県桜井市 北山城 調査報告

千田嘉博・西谷 漸・村田 陽

はじめに

奈良県桜井市北山を中心に一部遺構が桜井市高家・今井谷・横柿にまたがって所在する北山城は、1988年に奈良大学城郭研究会によって発見された中世城郭跡である。標高465mの丘陵頂部に主郭を置いたこの城は、南北400m×東西200mの範囲におよぶ。そして北山城は地域の歴史を考える手がかりとして重要であるだけでなく、後述する1437-38年（永享10-11）、1506年（永正3）、1559-63年（永禄2-6）の3度の戦いを画期とした多武峰城塞群を用いた合戦の実像を、城跡から考えるために重要な位置を占める。

しかし北山城については、城跡としての認識や基礎的な評価が適切に行われておらず、近年、奈良県がまとめた『奈良県中近世城館跡調査報告書』では、所在不明として、分布図からも落ちている（奈良県2020・2021）。そこで改めて北山城を明らかにするとともに若干の考察を行って、埋蔵文化財包蔵地として適切に保護し、活用していくための基礎情報にしたい。

なお本稿は「はじめに」を千田が、1から3を西谷と村田が担当し、「まとめ」は全員の協議によった。そして全体の構成と文章を千田が校閲して成稿した。

1. 多武峰城塞群の位置と歴史

多武峰城塞群は村田修三氏が明らかにした特異な城郭群で（村田1981）、多武峰妙楽寺（現 談山神社）を中心に、周辺の丘陵全体に散在的に展開した広域におよんだ城郭群の総称である（図1）。Ⅰ御破裂山地区、Ⅱ下居出城、Ⅲ念誦嶺地区、Ⅳ岡道地区、Ⅴ冬野城、Ⅵ多武峰城塞跡東地区の6地区から成立したと考えられてきた。このうちⅢ念誦嶺地区の北側に位置する北山城は長らく知られていなかったが、1988年に奈良大学城郭研究会が発見し、機関誌で踏査成果を報告した（奈良大学城郭研究会1988）。この成果を受けて桜井市は「北山郭」として報告書に記載した（桜井市教育委員会2011）。ところが2021年の奈良県による中近世城館跡では、位置不明としている（奈良県2021）。

多武峰城塞群は12世紀後半以来、度重なる合戦の舞台となりその都度普請が加えられ成立したものと考えられている。村田氏は多武峰城塞群成立の画期として、（1）1437-1438年（永享10-11）の後南朝勢力と呼応した越智・箸尾両氏が立て籠もり、幕府軍と1年4カ月にわたって対峙した期間（永享合戦）、（2）1506年（永正3）8月に国一揆を結んだ大和国衆のうち十市・箸尾・越智氏らが立て籠もり、細川政元の派遣した赤沢朝経の軍勢と戦った期間（永正合戦）、（3）1559-63年（永禄2-6）にかけて十市氏が立て籠もり、松永久秀の軍勢と戦った期間（永禄合戦）、の3時期であったとした。

その上で、村田氏は、平安末期から永享の戦いにかけて多武峰一帯の城郭化が進み、永正合戦でそれぞれ



図1. 遺構分布図（藤岡2018）を参考に作図）
 I.御破裂山地区 II.下居出城 III.念誦嶺地区 IV.岡道地区 V.冬野城 VI.多武峰城塞跡東地区 VII.北山城 VIII.経ヶ塚山城
 A.高家城 B.祝戸城 C.岡城 D.飛鳥城 E.奥山城 F.雷城

の地区の縄張りの基本が完成、永禄合戦で一部を改修して強化したと分析した（村田1987）。一方で、藤岡英礼氏は、現在見る縄張りは永禄合戦時に成立したとし（藤岡2018）、今後の議論の進展が期待される。

2. 現地調査成果

北山城はⅢ念誦嶺地区の北側に位置し、桜井市北山を中心に、高家・今井谷・横柿の地域にまたがる丘陵に立地する。踏査の結果、主郭は標高465mの丘陵頂部にあり、北東へ延びる尾根上に曲輪を配していた（図2）。曲輪群を展開した主尾根には複数の堀切りが認められ、派生した尾根にも複数の小規模曲輪群を確認できた。

主郭Ⅰは先述したように標高465mの最高所に位置し、南東部はスロープ状になって東側の一段低い帯曲輪につながる。また西側もスロープ状に下り曲輪Ⅱにつながる。主郭Ⅰを中心として放射状に延びた尾根には小規模な曲輪群があり、これらの曲輪群は主郭Ⅰに中心にした階層構造をもっていて、主郭Ⅰの求心性を高めている。

曲輪Ⅱは主郭Ⅰと南端の曲輪Ⅲとつなぐ位置にあり、曲輪面の削平はやや甘い。また曲輪Ⅱの西側には派生した尾根に、よく削平した曲輪が6段程度続く。曲輪Ⅱの南側には現状で幅約5m、深さ約1mの堀切りAを設けていた。堀切りAのさらに南は尾根上に削平の甘い曲輪が延びて、曲輪Ⅲに至る。曲輪Ⅲも全体的に削平は甘く、曲輪中央部がわずかに高まった自然地形を残している。曲輪Ⅲの南東部分には、やはり自然地形を残した曲輪が認められた。

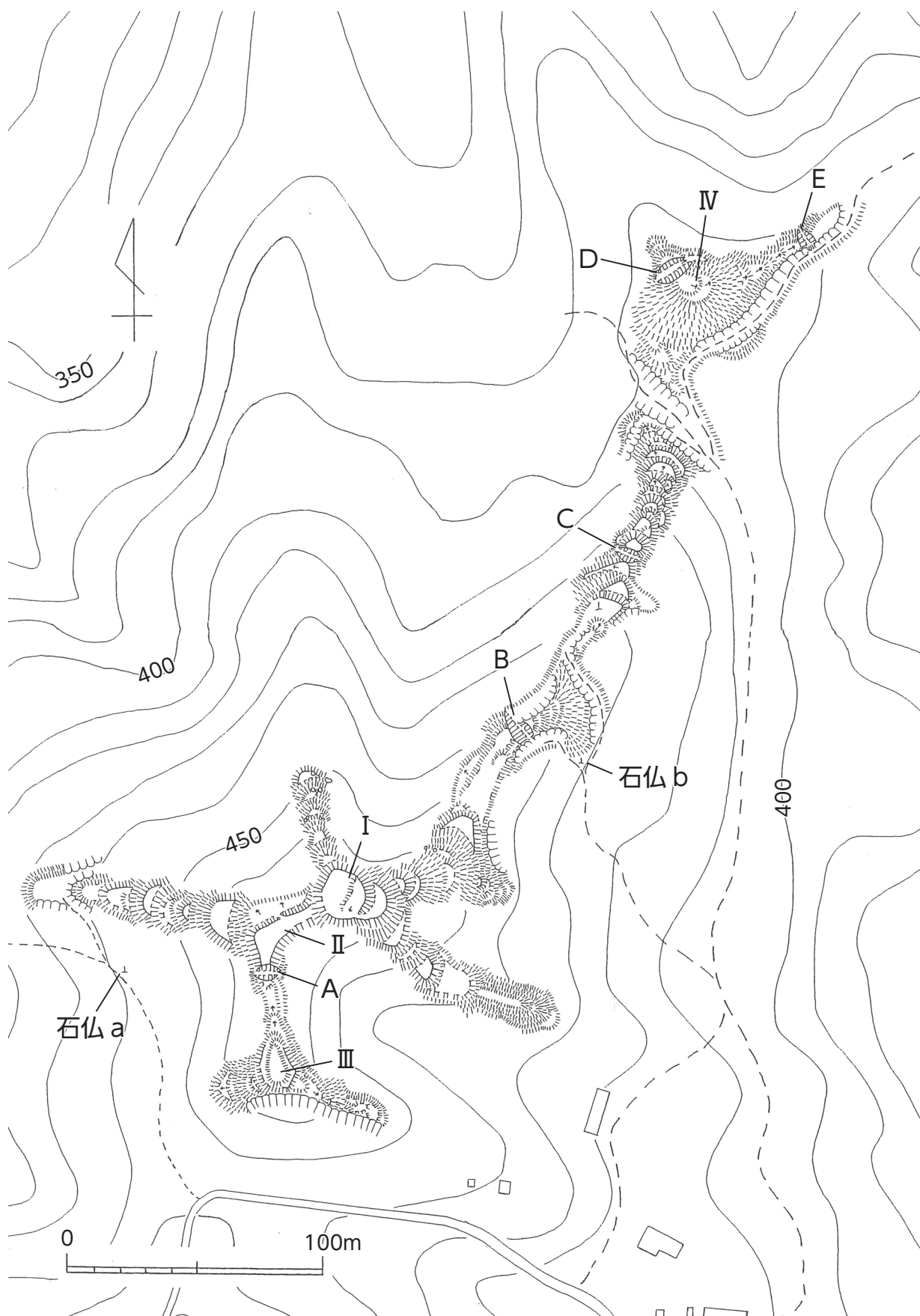


図2 北山城縄張り図 (西谷・村田作図)

次に、主郭Ⅰから北東方向には、尾根上には200mに渡って曲輪群が続いていた。主郭Ⅰの周囲は基本的に急峻な切岸を設け、北東方向の斜面には小曲輪が5段程度連なっている。この小曲輪の先は長辺約30m程度の長細く続く尾根につながる。ここも削平は甘い曲輪と認めてよい。なぜならこの曲輪の北東端は幅約4m、深さ約3mの堀切りBを設けていたからである。

破壊道などによってしばらく曲輪を確認できない斜面を隔てて、近・現代の墓地がある部分がある。ここも現状は墓地だが、北東方向に2段の曲輪を備えた先に、幅約1m、深さ約50cmの堀切りCがあるので、本来は曲輪であったと判断できる。この堀切りCの先は、7段程度の小規模な曲輪群が段々に連なっている。小曲輪群の先は、一旦、尾根の鞍部になる。ここにも堀切りがあった可能性があるが、鞍部が大きく破壊されているため、旧状は詳らかでない。

そして城域の北端にはもうひとつの頂部に占地した曲輪Ⅳがあった。ここも頂部の削平は甘い曲輪Ⅳの北西側の尾根に、幅約4m、深さ5m程度（曲輪Ⅳ側の比高差）の堀切りDを、北東側の尾根に、幅約3m、深さ約2mの堀切りE（写真1）を設けているので、曲輪として用いたのは確実である。堀切りD・Eのさる尾根の先には、踏査の結果、遺構は認められず、これらの堀切りを城域の北限と判断した。

また、城に隣接して石仏a（高さ約44cm、幅約33cmと高さ約32cm、幅約20cm）の箱仏が2点があり（写真2）、城郭としての使用した近接した時期に、丘陵を墓地として使用した可能性を指摘できる。



写真1 堀切E

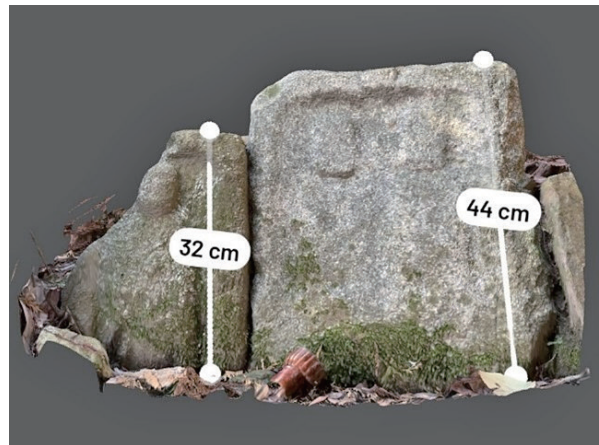


写真2 石仏a

3. 遺構の評価

北山城の縄張りの特性として、主郭Ⅰを除いた曲輪の削平が不十分な点が挙げられる。特に曲輪Ⅳ周辺の曲輪、堀切りBから北東に延びた尾根の曲輪は、自然地形に依存した部分が多い。こうした特徴から北山城は臨時性の高い城、つまり砦としての性格が強かったと考えられる。そして削平の甘い曲輪群は、軍勢が小屋掛けして駐屯した駐屯段と判断される（千田2021）。つまり北山城には臨時に軍勢が集結して布陣した役割を果たしたと評価される。

そして北山城の守りが、北方向を強く意識したことも読み取れる。北山城は、曲輪Ⅳと尾根上に設けた堀切りD・Eを北限として、ここから主郭Ⅰにかけて地形を利用しつつ、2つの堀切りと曲輪群を配置した構造をもった。主郭Ⅰから北に延びた尾根に展開した防御遺構群は、北山城の主要部を構成した。北方への守りを強く意識していたのである。これに対して、ほかの方向に延びた尾根は、基本的に数段の小規模な曲輪

群を配置することで完結していて、それらの方向への守りの意識は相対的に低かったのが明らかである。

現地調査で明らかにした北山城の構造の特性は、この城を築いた意図と歴史的背景を考える手がかりになる。注目したいのが1438年（永享10）5月6日の『看門御記』の記述である。「去一日大和有合戦。敵方城倉橋 橋寺 両所落焼払云々。敵方数多被討」とあり、前述した大和永享の乱に際して、越智氏・箸尾氏らが倉橋と橋寺付近に陣を構え幕府軍と交戦し、敗れたと判明する。このうち北山城に関わって重要なのが、倉橋の記載である。

倉橋は北山から今井谷を経由した北東に位置し、幕府軍の進攻ルートにあたっていた。北山城の立地と構造を勘案すると、「倉橋陣」と連動した越智氏・箸尾氏のいずれかの大和勢の詰の砦として、北山城を設けた可能性を指摘できる。そして幕府軍は、倉橋を越えた後に今井谷を経由して前進したと想定され、北山城の構造は、そうした幕府軍の動きを想定して備えたと考えてよいだろう。

さらに倉橋方面からの幕府軍の進攻に備えた多武峰城塞群の城に、Ⅱ下居出城がある（図3）。下居出城は倉橋の南に接し、東に多武峰街道、西に今井谷、高家へ通じる道筋が交わる交通の要所であり、1563年（永禄6）の戦いでは桜井方面の最前線となったと推定される（藤岡2018）。下居出城は城域南端に小規模な曲輪が散在して、軍勢の駐屯が想定されるものの、北山城と比較するとその規模は小さい。

ただし下居出城の主郭切岸北東斜面には、16世紀中頃のものと思われる畝状空堀群が認められる。これより下居出城は、藤岡氏が想定した永禄期の戦いに際して改修を加えられたのが明らかになる。同じ多武峰城塞群を構成した城であっても、それぞれが戦いに対応した構造の特性をもち、遺構の時期差からはそれぞれの戦いがどう展開したかを読み取る史料として考察を深められるのである。

北山城と下居出城が永享合戦の段階から同時にあったかどうかは、地表面観察からだけでは確定できない

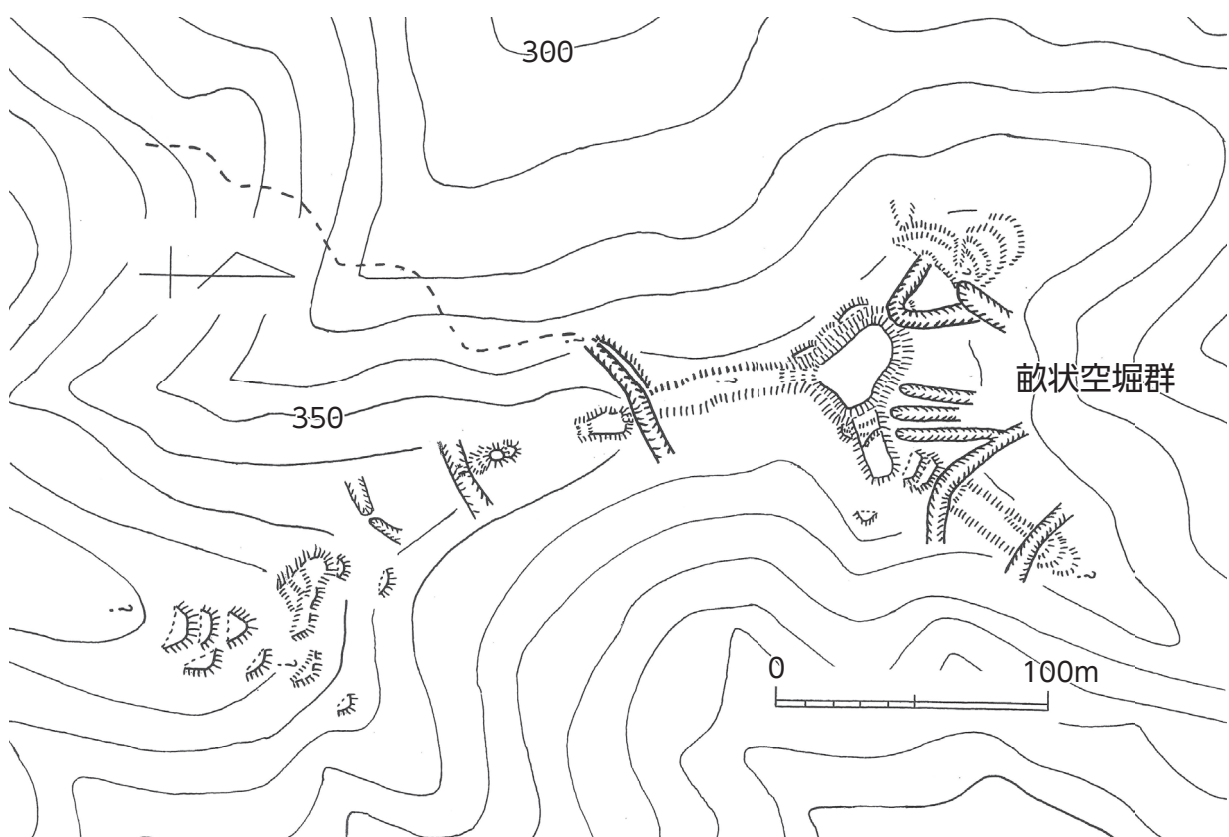


図3 下居出城縄張り図（高橋2022）を参照して村田が再トレース

が、より古い永享合戦段階の多武峰城塞群の実像を捉えるために、北山城は重要な意味をもつ。文字史料から経過を分析するとともに、北山城で試みたように、現地に残る城郭遺構を史料として読み解くことで、複数回におよんだ多武峰を巡る戦いの理解を飛躍的に深められる。そして、ここでは北山城と下居出城の構造比較から、永禄合戦において北山城よりも前線に位置した下居出城を戦略的に重視し、防衛拠点として改修した可能性を指摘しておきたい。

まとめ

北山城は皿念誦岬地区の北に位置した中世城郭で、城郭の構造から臨時に軍勢が駐屯した砦的な城と評価される。『看門御記』の記述から、北山城は1438年（永享10）の合戦に関わった蓋然性が高く、また下居出城との比較から、永禄合戦では改修を受けておらず、永享10年段階の砦あるいは陣城の実像を伝える貴重な城跡であることを明らかにした。

北山城が今後、適切に埋蔵文化財包蔵地として位置づけられるとともに、多武峰を巡る戦いと城塞群の研究が進む一助になることを期待したい。

謝辞

本報告にあたって、奈良大学大学院の寺田碧氏から史料について教示を得た。記して感謝したい。

参考文献

- 桜井市教育委員会 2011『奈良県桜井市 多武峰念誦岬地区の研究』桜井市教育委員会
- 千田嘉博 2021「関ヶ原の戦い」『新説 戦乱の日本史』SB新書、SBクリエイティブ
- 高橋成計 2022「下居出城」『奈良県中世城郭事典』戎光祥出版
- 奈良県 2020『奈良県中近世城館跡調査報告書－第一冊分－』奈良県
- 奈良県 2021『奈良県中近世城館跡調査報告書－第二冊分－』奈良県
- 奈良大学城郭研究会 1988『城』第17号
- 藤岡英礼 2018「多武峰城塞群」『図解 近畿の城郭』第V巻、戎光祥出版
- 續群書從完成會 1930『續群書從・補遺二 看門御記（下）』
- 村田修三 1981「中世城郭の縄張り」『日本城郭大系』別巻I 城郭研究入門、新人物往来社
- 村田修三 1987「多武峰城塞群」『図説 中世城郭事典』第二巻 中部・近畿1』、新人物往来社

千田嘉博（奈良大学 文学部 特別教授）

西谷 漸（奈良大学文学部 文化財学科 2 回生）

村田 陽（奈良大学文学部 文化財学科 2 回生）